

三國妖狐傳  
全

特42

782

092505-000-7

特42-782

三國妖狐伝

泉竜亭 是正/著

M16

DBP-2158





三國妖狐傳全

特42

782



快報傳

明治十五年癸月

泉竜亭是正記

鹿臺歌舞遺	殷祚為灰塵	今日九尾狐	昨夜傾國色
不有耆婆術	國中渾為空	舌刀刺烈夫	笑靨陷君子
一朝聖教廢	天竺	芙蓉和秋風	日本
肉林華競春	唐土	飛蓋酒池澳	

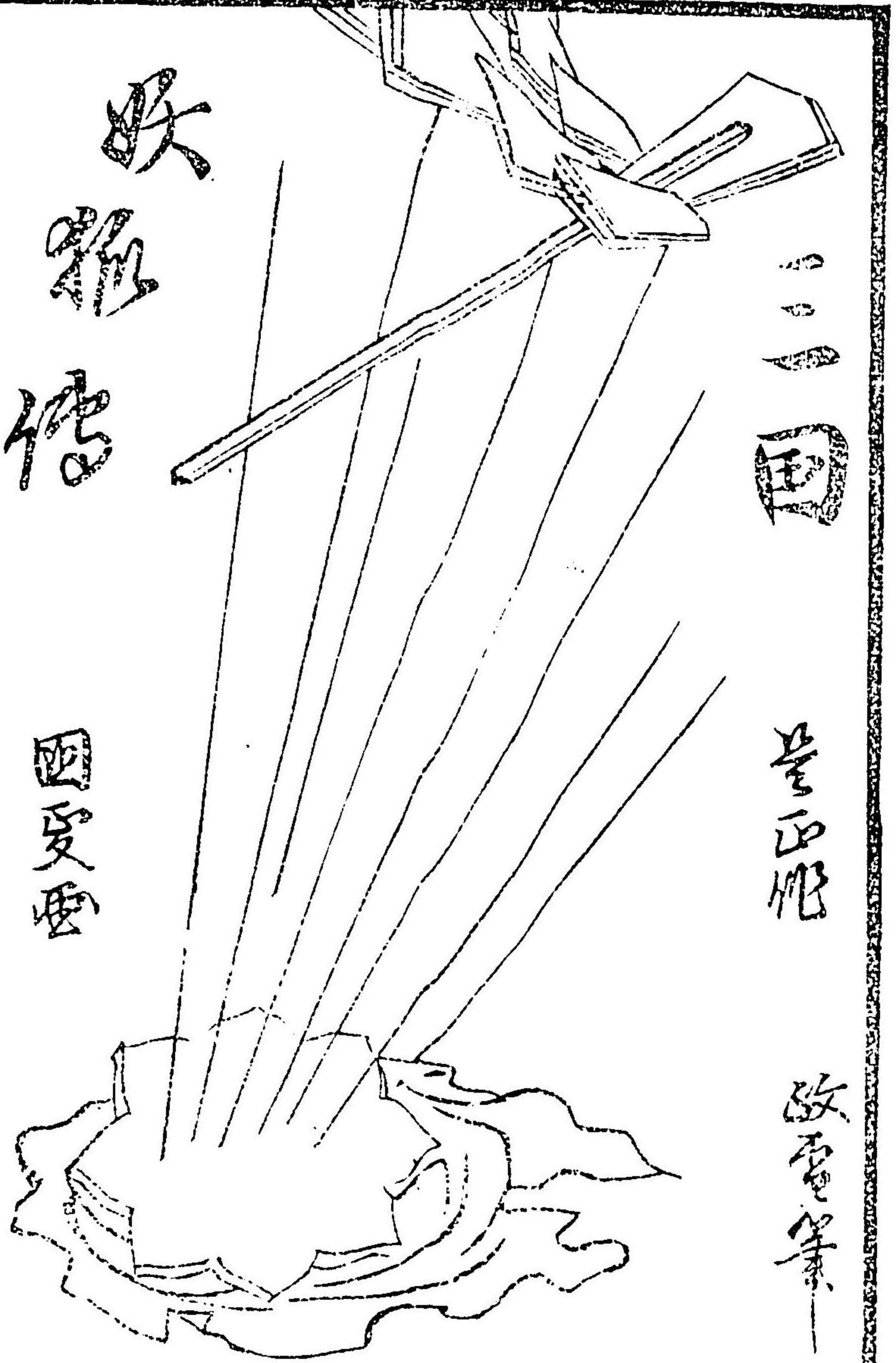
妖  
魁  
信

國  
受  
要

三  
國

皇  
正  
魁

改  
舊  
業







三国傳の悪胤  
 王濂の前身羽の  
 帝小仕宮中お權  
 と違ひて成と振



大色繪







深  
記  
傳



夕  
才  
本



三國傳(號三國)の...  
 あり國王と蕩一人の精を  
 吸尽し人倫と断て此の天  
 下と魔界をなるといふ  
 る悪魔を白面九尾の  
 狐が其根元へ悉數を奪  
 ぬる事...  
 十代の帝位...  
 勇他が異なり...  
 下あ及ぶ者あり...  
 國の諸侯と從へ政とと  
 施すう万民...







○泊り夜  
羊と覺しき  
魔風と吹来り  
燈天とく消せる物



怒りて西  
西伯侯兵と向らふ忍  
其臣宜生といふ者と使者を討て  
益道ありといふの王命あり何ぞ背て  
冀國と失あり事と好まらぬと理解と  
説けり中蘇護是の伏して自ら壽羊  
と伴ひ王城中赴く時思ふの旅宿あり

壽羊が腰元未だ一人寢む  
しと在けりか浴しや金  
毛白面尻尾の狐壽羊が  
寢夜中近付と見し腰  
元守り刀と引抜早くも切符  
一が速りか機殺され被狐の壽羊が  
精血と吸尽し其體中入替り即し居  
ころりたるを知りの変更ありけり去り  
夜明て後女一人見ゆれば其野此野と  
尋し草村のうらみ死てありける  
人の不思議か思ひ是非あり其野あり  
寺中葬せり夫より後護の我女の狐  
とありしとつら知らず此野と立出





○泊りか夜  
羊と覚しきち  
魔風とらと吹来り  
燈火とぐく消けぬ所



西伯の命ト征伐せしむ  
其臣の輩とて使者として討王  
毎道ありとて... 何ぞ甘て  
其國の夫ありて... 理解と  
... 自く... 壽羊  
と伴ひ玉城小封... 時息子の旅宿の

壽羊の... 一人... 命  
... 命  
元持り刀と引抜早くも...  
... 壽羊が  
精血と吸尽し... 替り... 君  
... けり... 云の  
夜明て後女一人見守り... 此所と  
... ありける...  
人々不忠後... 兵野あり  
寺中... 我女の乳  
とあり... 立出





四日と経て王城に着  
 宮中お伴いけし六封王  
 喜んで寿羊と見  
 玉る中嬋娟とて  
 玉る中嬋娟とて  
 して殿へくくれば  
 媚ありし六封王限り  
 悦びか獲獲の教多の  
 と玉る中嬋娟とて  
 寿羊と置愛あり名を  
 改める存夜嬋娟と  
 あけり政事と  
 急り王へ

女が下



百官兼め奉ま  
 つまども更お  
 用ひ玉るホ  
 師淵と音  
 曲お長ド  
 人お招き  
 人と招き  
 哥舞お興  
 と催し師  
 淵が進め  
 おより  
 て受仙  
 官との

此の姫と  
 お此臺の宴  
 玉る其此  
 因於南山の  
 士お雲中子  
 仙人とのゆの

決断書









以主除るせん六国  
 家危しと直ち  
 お都お至り此と  
 と大史令の社元  
 銃ふ養へる社元也

新の刑作  
 名目と作  
 り銅の社

田塗裸めて此程と抱  
 まるゆを皮肉焦たき  
 腎碎け忽ち灰とる曼と  
 炮烙の刑といふ又五十夫の  
 定と 堀真中お蛇百  
 且んを

四十八



大よおどろひて討王と兼り  
 を曾て用ひて姐妃が聲言めて  
 突お社元銃と一の此後兼むる  
 者お入社元銃とりて例と  
 すとありけるの 後ハ敢て兼  
 むる者もあく 討王姐妃ゆ  
 兼る者もあく 討王姐妃ゆ  
 一の此後兼むる  
 と兼まきと痛  
 星様と号け  
 姐妃と供お此  
 星本堂り又  
 人と教す





大いふおどろひて討王を兼め  
 うと曾て用ひむ姐妃が楚言めて  
 終お社元銃と加一の此後兼む  
 者あふ社元銃とりて例と  
 すとあつるも且後ハ敢て兼  
 むる者もあつて討王姐妃ハ  
 忍溺り民の力と苦  
 一め殺十夫の高殿  
 と築き長と桐  
 屋樓と号け  
 姐妃と供お此  
 皇お登り又  
 人と殺す。

と鑄を内お  
 炭火と焚外お  
 油と田



主除くせんハ国  
 家危しと直ち  
 お都お至り此と  
 大交令の社元

いと好んで  
 新小刑罪の  
 名付と作  
 り銅の柱

討王  
 姐妃









王と我の... 野... 面... 姫... 伯... 系... と...

進め我父とも苦しめ  
 我父又殺さんと  
 是る我ハ死をるるも

○推々の悪行と

女...

+



君父の為ゆハ惜む  
 べき命あね  
 ど惜むべき  
 湯王より

十二代と怪玉う

天下遠く... して汝が為

打付... 姫妃ハ早く身とさけて  
 逃入る... 武士お命して

切殺... 其肉と煮び... 西伯  
 お喰... 西伯我子の肉と知りつ  
 味... 是と喰... 姫妃手  
 と打て突う西伯聖人と...

沃丸傳

+





玉の涙をよみて 嗚呼 姫の涙をよみて 我の涙をよみて

大公望

追め我父の苦み 我も我の涙をよみて

女

七



西伯

君父の為にお惜む

へき命あはれ

と惜むへき

湯王より

十代と征王

天下遠く

おたがふ

打行を

遊入る

切替

お噂

味

と打

本

女が為

琴と取て

身とさけて

氏士お命

西伯

の向と知りて

姐如手

の

の

の

の





田として磻溪の  
 石室の子牙  
 後太公望  
 といふ者を得  
 玉を西伯降々  
 政と納め玉う  
 其後西伯病お深て終小薨す  
 積年既お九十七也後堯一して周の  
 文王との小正の是あり去へ西伯疾薨  
 ちるのち太公望西伯の長子姫奈と以て後と選し  
 武王の武王是あり此時紂王ハ跡々悪行増長し々  
 罪をき人民と殺すし具教と知らば姫妃ハ猶ヨシ

より日非ぞ



天子版刻  
 我子  
 西伯思  
 返一雷震  
 玉う  
 西伯思  
 を謝して  
 實の以の  
 徳と引王ハ  
 版の民紂王の  
 毎道と怒り  
 實の以の  
 支りて  
 西伯ハ  
 従う者日  
 夜救と知  
 ら然る  
 西伯夜版  
 其の懐お入と  
 夢見て覺し



心の中  
既び  
人の種  
と



節至来けり心と  
大王の斬宮と進める  
むと天気あわつて  
見るふ般の国城さるの気  
け今般と責る時ハ戦

掛る  
雷

と道  
公王夜や

んと武王お羨りなれば  
発せんと太公望と并りて  
大軍五万余騎と隨  
豆潼関お至り一時うめて  
為るに雷震と此所  
へ道はかき勇進んで行  
武王の勢早孟津河と渡  
ととも村王ハ耳あものど  
只鳩酒とてくもむ既  
般の都お責入ぬ村王おど  
するとのとも太公望の  
町をばして鹿臺お登  
ひ入て崩ト玉う此時ゆ

不思議  
黒雲  
九尾の狐  
けり  
国と魔  
伺う  
竭国の  
子班  
のハ声  
君の  
万民悦  
長ト  
鵬岳又



心中の既人の種とを



班豆太子

田姐死ハ身

必き時節至来はりし心と  
込て尚討玉小斬宮と進める  
あぞ万民眼むと天氣あわしき  
太公望天文を見る小彼の國城さるの気  
ぎありと覚へたり今般と責る時ハ戦

と造きんと咒文と  
と之風と起し  
雲とよ次白昼間  
夜と夜もども太  
公望此術と能る  
の法と行ハハ姐  
死ハ叶ハレ  
思ひやれ熱身しよ  
星光りと放ち虚中  
小庭上らんとあせし時  
雷震と太子般刺とが  
拵つて二段ふ切倒しけり

とて勝利ありんと武王の妻一々れば  
武王脱てんで軍と発せんと太公望と拜して  
東征の大元帥とあり大軍五万余騎と隨  
ぐ之冀及ともち立潼関に至りし時くひて  
太公望雲中士と為りし雷震と此所  
より將の列おかへ道とかり勇に進んで行  
程の般の軍鑑武王の勢早孟津河を渡  
りしと注進をまじりし武王の耳あゆむと  
姐妃が也お迷ひは嬌酒ととて既  
ゆて武王が勢ハ般の都にお入ぬ討王おど  
ろひて城お防戦するといふとも太公望の  
謀事お破らる叶はりて鹿臺お断登  
り猛火の中へお入て崩し玉う此時由

不思議や姐妃が身の焼より  
思雲田んへ立登り合をて行  
九尾の狐雲并たるか小庭より  
けりて文とて天竺を渡り後  
田と雷震おかきんと悪術拵を  
伺り計時お通り南天竺界  
兜國の帝也天步朝大王の時  
子班豆太子とめりし幸あり  
夕の神父王と寺しく仁善の  
石の中をよと下と懸る玉ハハ  
万氏脱び小庭お燃る所年  
長ト玉ハハ雷文雄明君  
崩岳又の四六は王と老





玉の音の如  
 第一の如  
 玉の音の如

此の如く  
 玉の音の如  
 玉の音の如



可主渡らせ玉へ太子へ朝政を委ね玉を玉  
 評義の教諭と伺ふ吉日と撰み班  
 却讓位の礼と行ふべきは定む  
 けも然るお此君の文  
 等と好み具余力  
 管弦お心とろり  
 さを感角葉と  
 以て持び玉  
 うお遂中

その  
 妙頭と傳









阿比見当りし臣の  
不審教忍ひ此由と  
羨しんれ六太子の  
苦しう〜  
連宗とこの  
仰きて彼婦人との

高殿の誘引ハ  
大子此婦人と  
見玉うわ婦箱



とて花の露を天女の  
影向うと疑はるる太子  
つゆ、却覽して物汝ハ此国の  
者とも思ひんれ何国如何者  
あると向せ玉ハ婦人の泪流  
し妻の元唐土殿の分玉の体  
ありし周の武王大軍と以て  
分玉と亡し妻と國のあり

かんとせうと由  
田  
漸々退去速く  
此國ゆまりし身と  
寄すんかまあ〜ハ





何れも其の臣よハ  
 不審に思ひ此由と  
 疑ふに其の太子ハ  
 何れも其の臣よハ  
 疑ふに其の太子ハ

荳陽夫人

孫太子

何れも其の臣よハ  
 疑ふに其の太子ハ



何れも其の臣よハ  
 疑ふに其の太子ハ  
 何れも其の臣よハ  
 疑ふに其の太子ハ

廣文大臣

何れも其の臣よハ  
 疑ふに其の太子ハ













大子目早く見附玉ひ誠や狐の

先香腰を遣け  
 門を向て懐き  
 昔天子夫人  
 中曼と昔  
 王と夫人  
 心の驚  
 けども  
 らぬ  
 体面を  
 香腰を遣言しく  
 湯衣と掩せ尚香



蘭麝と愛すと古事あり雅うある射と取と仰  
 の後者う故つ矢のねのいをそれて狐の顔や斗り  
 射子つゝの狐の鼓馬さ遊笑ける身草陽う正膝  
 と狐王とぬり浅間しん此夜太子り  
 慈陽が顔と包と居一故何せと向手  
 のて赤宵の雀う頭扁甚放心地例あつた  
 どの早速名高香腰を遣と見と手う香腰心  
 脈と見て大か驚き別殿のまりて太子の言上  
 どの夫人の脈体心得葉と正小野  
 狐の葉成しとのせ

波と診脈の義論  
 の及び帝前不於  
 一言伏しんか  
 香腰の弥不  
 首尾とを  
 子却答と  
 蒙りあ  
 ぐつ魔  
 堀陀  
 国の  
 天神へ  
 竹並言





坂部屋有羅

大子目早く見附玉ひ詰や頼の  
湯衣の袖と前衣



蘭菊と愛すと古事あり雅うある射て取と仰  
 小従者う故つ矢のねらひをそめて頼の顔ゆ斗り  
 射すのころ頼の顔と遊矢ける母華陽う正麻  
 と心甘玉を母を浅間へこれ夜太子の  
 華陽が顔と色も居一故如何せと向手  
 のぞきおの指より頼の顔に放心地例あり  
 と早く早速名西答返すと早く見と手う老若婆心  
 脈と見て大お驚き別殿おまりや太子の言上  
 乃の夫人の脈体心得葉一と正小野  
 頼の来成一とのせ

潔と診脈の議論  
 お及び帝前小於  
 一言はくく  
 老若の脈不  
 首尾とち  
 ぞ和答と  
 業りあ  
 ぐつ魔  
 湯陀  
 国の  
 天神  
 祈誓言





阿空あからかたの湖うみに  
 木へ人向鳥獸たまの至いたる  
 こと能あたりすと神勅しんしやくと  
 や香か言ことばあつくと  
 再度また斑まだら足あし太子たいていの願ねがひ  
 乃すなはち時分ときわのつと被おま  
 差さ有あ見みせむれへ不思ふし義ぎ  
 夫人うらなゆ忽たちちの身みと振ふるら  
 再また以も周しゅうの国くにへ飛と行ぎやう衰せ後ご  
 人民じんと教しやくさめ。



如ごとく  
 指血さしちと吸ある  
 幽王ゆうおう亡なる  
 の後のちの  
 周室しゅうしつの



空に霞を巻く曉の天神出現在り金鳳山の葉三樹を被け玉ひ押  
 まへ人向鳥嶽に至る途二度降りて見る時ハ五回叩き見通し一紙  
 神託とすくと神効とすりと王と被愛見て是兒一づ不慮の美  
 香丸おのゝとて返り巾一被の有り久の押戴き  
 井原班足太子の願ひて華陽夫人と向答ふ  
 必ひ時分ハありと被葉王樹と取出し夫人の  
 差有見せられハ不思の事今迄芙蓉の華陽  
 夫人ハありお身と振りて面ハ金毛白面と勿  
 出ハ周の目ハ飛行飛燈と名象幽三とたりし  
 く風と教しめ。



入娘ひつるいと能を  
 目の本ハ渡らん  
 悪執ハ折と伺ハ断り人皇

深女



音血を吸取  
 幽王亡  
 の後ハ  
 周室ハ

甲斐代の御宇天平年中吉備大臣  
 入唐ありて帰朝の時悉捕ハ時  
 来りて吉備公の便舟で日の本  
 渡海あり山城の国清水の辺り  
 御如原の輪子とありて有りハ其比  
 洛陽北面の武士坂部の子司行羅子  
 毎故清水の観音中五領の下の  
 道傍の被蔭ハ赤子の泣きを聞  
 拾ひ上置ハ観音の被守  
 あめと我家へ帰り名を  
 深女と名夫婦心とて  
 養育をす成長ハ陸  
 谷顔天標



聰明今利美を、諸藝習て、  
 聞者驚き、夫婦の寵愛、  
 元幸の春主上より、  
 雲閑の身、  
 今年七歳の、  
 願ひて此哥合、  
 弟哥と奉つ

つと久月御  
 果れ内  
 成り  
 父

行遊哥所、願ひ春内、  
 主上と初め、  
 如何ある哥と、  
 此哥と奉つ



孝信親

田のより、  
 藤敷帝の、  
 の余り、  
 より女子、  
 より大内、  
 と玉子の



取上、  
 燈火、  
 我影、  
 別、  
 吟、  
 哥の、  
 女十七、  
 歳の花、  
 の顔、  
 がせ











女  
才  
才  
才

阿比勇進人奈須野  
悪徳を根絶して武名  
人間鳥獣出小至る迄此  
殺生石と名付く  
法華寺の住僧玄  
翁和尚勅命  
て奈須野が



張り神より賜る武器  
なる然るも悪徳が魂白石と成  
ハ毒気が当りて死する  
○原小至り一石と示し  
往生得脱と授け佛子と持  
て一度打ハ毒石砕けて二条  
の白き立登る其の中ハ二八  
平の七女綾羅紗の袴  
て槍扇とくじ玉藻  
の前の姿もあつた  
嬉し気合字と西の空ハ飛去  
悪徳の成佛業あり此砕け石ハ美作の  
国高田の庄へびしと所の者玉藻大明神と由



九月  
二十日  
祭礼  
出で  
く

明治十六年一月廿九日御届

編輯兼  
出版人

美作形田段武藩地  
見玉又七







